
トリーの歌う、愛のうた

らみ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

トリリーの歌う、愛のうた

【Nコード】

N4009BA

【作者名】

らみ

【あらすじ】

拾った卵を孵してみれば、生まれてきたのはふわふわ水色の可愛い雛。鋭いクチバシ、太い足。きつと立派な鷹になる。そう思っ
て育ててきたのに産毛が抜けると現れたのは、羽ではなくて光り輝く青いウロコ。この仔はいつたいなんの子供？

1 水色のヒナ

きらきらと光が音を立てて降り注ぐ。

さらさら流れる川の面は陽射しを弾いて眼に眩しい。

そよぐ風が梢を揺らすと葉ずれが徐々に広がって、まるで軽やかに謳う小鳥の伴奏をするようだ。

森の中、あちこちで繰り広げられるささやかな即興の演奏会。

優しく心地よい音色とうらかな陽射しがぼかぼか背中を暖める。そのうえ釣り竿はぴくりとも動かない。まぶたは自然に重くなり、僕は一度伸びをして、そのままゆっくり後ろに向かってに倒れこんだ。

樹々の枝の向こうには、澄んだ青い空がのぞいている。そしてゆっくり流れる白い雲。綿毛のようにふわふわで、丸いそれが2つ重なりまるで僕の毛玉に瓜二つだ。

嬉しくなつて、僕はそつと姿勢を変えた。

両肘で身体を支えて小さな籠をのぞき込む。

藁の上に敷いた布に埋もれているのは小さな毛玉。夜明け前の薄い青空を写したような水色の、孵ったばかりの鳥の雛。

名前はトリー。

たったひとりの僕の家族だ。

すー ぴすー

耳をそばだてれば小さな寝息が聞こえてくる。

こうしてぐっすり寝ていると、トリーは本当に水色毛玉そのものだ。ふわふわの羽毛の中からわずかに見える、先の曲がった黄色い

クチバシ。もしこれがなかったら、どこが頭なのかわからない。そして光が当たると羽毛の先から輝いて、トリーはまるで生きた宝石のようだった。

こんな綺麗で可愛い生き物、きつとどこにもいやしない。大きくなったら、きつと目もくらむような美鳥になる。

やがて訪れる、りりしくも美しい鷹を肩に乗せて歩く未来。僕の夢は広がってゆく。

そのままうつとりトリーを眺めていたら、さあっと風が流れていった。

梢が揺れて影が動き、まばゆい陽射しが毛玉をかすめる。その光が眩しかったのか、身を震わせると水色毛玉はぱちりとつぶらな眼を開けた。

2、3度ぱちぱちまばたきすると、トリーはきゅっと喉を鳴らす。それからその黒い瞳で僕を見上げ、そして大きく口を開けた。

ぴゃー　ぴゃー　ぴゃー

お腹がすいた、お腹がすいた。ご飯ちょうだい。

頭全体を口にして、それはもう必死になってトリーは叫ぶ。僕と同じく親を亡くした可愛い雛。僕がちゃんと育てなければ。

そんな決意がいつのまにか言葉になっていたらしい。不意に視界が陰ったかと思うと呆れたような声がかけられた。

「……そうは言ってもな、ミカ。コイツの卵、踏んだんだろ？　ひついで父ちゃんだよな」

「アキ……あれは不可抗力だよ」

僕のとなりにひよいと腰を下ろしたのはアキ。村長の息子で幼なじみだ。僕たち同世代の中では一番学もあり、頼もしい兄貴分としてあれこれ世話を焼いてくれる。トリーの卵が孵ったときも、餌がわからず途方に暮れていた僕に生き餌がいいと教えてくれた恩人だった。

「はいよ、差し入れ。どうせ釣れてないんだろ？」

ひよいと手渡された箱の中には青菜と一緒にうごうご動く、大きな芋虫が入っていた。

また、これか。思わず顔をしかめると、アキは笑いながら背中を叩く。

「ほらほら、可愛いトリーちゃんがお腹を空かせて待ってるぞ？」

「わかってるけどさあ」

ぶよぶよする皮をつまんで大きく開いた口元にあてがうと、トリーはぱくりと口を閉じた。上を向いて小さな羽をばたつかせ、あくあつくと大きな芋虫を丸呑みする。この食事には、いつだってはらはらする。喉に詰まらせたらどうしようとしてそれが気になって仕方がないのだ。

「思いつきり踏みつけられて割れなかった卵から生まれたんだ。餌を詰まらせたなりなんかしないよなー」

「だから、わざとじゃないって」

きやるる、きやる、きやるるるー

「なー、トリーはちゃんとわかってるよなー」

「ホントかよ……」

「そうだよ。だからこんなに懐いてるんだ」

「あー、はいはい。そうですか」

「だからさあ、魚も食べさせてやりたいんだけど……」

桶の中は空っぽで、見ているだけで悲しくなる。トリーは鷹の雛だ。だから将来のためにも兎や魚を食べさせてやりたかった。でもトリーは生き餌しか食べないし、兎なんかとても丸呑みできやしない。だからせめて小さな魚をと思ったのだが、半日粘って一匹も釣れなかった。

はあ。溜息をつきながら水色毛玉をくすぐると、トリーはきゆうきゆう喉を鳴らしてうつとりと眼を閉じる。

「いまは虫でも仕方ないだろ？　すぐにでっかくなるさ」

「トリーは鷹になるんだよ？　いまのうちから肉に慣れさせておきたいんだ」

「鷹、ねえ……」

「なんだよ、このクチバシ見てみるよ。いかにも鷹って感じじゃないか」

「うーん、でも水色つてのが」

「空の色にとけ込むための保護色だろ？」

「そうかなあ……」

先の曲がったクチバシと太い足を見て、最初にトリーが鷹の雛だと言い出したのはアキだ。なのにいまになって違うだなんて、そんなことがあるだろうか。

アキだって、この辺りに住んでいる鷹のすべてを知っているわけじゃないのに。

トリーの卵はきつと高い木の上から落ちたんだ。僕が踏んでもびくともしない頑丈な殻だったから、巣から落ちても無事だった。そ

れにそんな木の上にあつたから、いくら探しても巢が見つからなかったに違いない。

山道を下っていたときうつかり踏んでしまつて僕は背中と腰を打ちつけた。息もできないぐらいに痛かつたけど、足を捻挫したりはしなかつた。

あのとぎ殻の中で、トリーはだいぶ大きくなつていた。踏まれてさぞ苦しかつただろう。でも僕が踏まなかつたらトリーは誰にも気づかれず、冷たくなつてきつと孵らなかつた。僕らはお互い幸運だったんだ。

子育ては初めてだけれど、きつと立派な鷹に育ててみせる。

僕はそうトリーに約束した。

だけど、ひとつだけ許して欲しいことがある。

毎日魚を食べさせてあげられなくて、ほんと、ごめん。

2 抜け落ちる羽

きゆる、きゆる、きゆるるっ

待って、と口に出す間もなくトリーはかぱっと口を開けた。

きゃー、きゃー、きゃー、きゃー

お腹がすいた、お腹がすいた、ひもじいよう。早くご飯ちょうだい。

握りこぶしひとつぶんだったトリーは、あっという間に大きくなった。いまでは握りこぶし2つぶん。雛の成長は本当に早い。

食べる量も急に増えた。ついこの間まで青虫一匹で満足してたのが、いまでは青虫なら5匹、地虫なら3匹は食べないと、お腹がいっぱいにならないようだ。

餌を集めるのも大変で、僕はついに地虫を箱で飼うことになってしまった。

「うつつ……虫ばかり食べてたら、トリーまで虫になりそう」

地虫は畑に住む害虫で、地面を掘ればすぐに見つかる。

だけどトリーが食べるには小さく固く、足が喉に詰まりそうで心配だった。だから獲った地虫を箱に入れ、餌を与えて太らせてからトリーに与えることにした。餌は野菜くず。特別なことはしなくていい。

だけどやっぱり鷹の雛に虫というのはどうだろう。将来虫取り専門の鷹になったらどうしようかと常に不安がつきまとう。魚は相変

わらず獲れないし、がんばっても3日に1度では、どう考えても足りやしない。

それにトリーの声がうるさくて。

きゃーきゃー頭に響く叫び声を早くどうにかしてしまおうと、僕は箱から地虫を1匹取り出した。手の上でころころ転がして、まずは余分なおがくずを落としてやる。次に腹側でちきちき動く足の間からゴミを丁寧に取り除く。最後に皮をつまんでぷつと息を吹きかけ埃を払ってできあがりだ。余計なモノを食べさせて腹を壊したらいけないと、そこはじゅうぶん気を使っている。

「ほらほら、できたぞー」

綿毛のような水色羽毛に覆われた小さな翼を必死になつてばたつかせ、頭より大きく口を開けてトリーは必死になつて餌をねだる。このとき短い尻尾がぴこぴこ動いて、これがまた可愛いくて仕方がない。

頬をにんまり緩めながら、手にした虫の頭をそつと口の中に入れてやる。するとトリーはぱくりと食いつき大きな地虫を一生懸命食べ始めた。

クチバシを開けて天に向け、僕の親指より太くて人差し指より長い地虫をゆっくり腹の中に納めていくのだ。全部食べると一度僕を確認し、そしてまたきゃーきゃー鳴いて「もつと」とねだる。

今日も一度に3匹食べて、トリーはやつと満腹したようだ。くるくるくーと喉を鳴らし「美味しかった」と言っている。そこで喉の下をくすぐると、トリーはうつとりと目を閉じた。

あまりに気持ち良さそうなので、さらに両手で身体全体をくすぐってやる。すると、水色の羽毛がふわりと膨らみ黄色いクチバシがわずかに開いた。

きゅー…………るる…………

ああ、幸せ。

そんな声が聞こえた気がして、僕も嬉しくなってくる。

トリーが喜ぶことならなんだってしてやりたい。トリーの幸せが、僕にとっても幸せなんだ。

食べては寝る、そんなトリーの生活もこのごろ少し変わってきた。大きくなつて力がつき、自分で動けるようになって色々な行動をみせてくれるようになったのだ。

きやる、きやる、きやるるるー

小さなお尻を高く上げ、ぴよこりと飛び出た尻尾を振りながら、トリーが指の間に懸命にクチバシを這わせている。小刻みに動かしながら根元から指先へ、何度も何度も啄むような仕草をする。どうやら僕に毛繕いをしているようだ。

ずっと餌と病気の心配ばかりで、なにかを教えるなんてこれまで考えたこともなかった。なのに喉の下をくすぐったらトリーはちゃんとお礼をしてくれる。

知らない間にちゃんと成長してるんだ。

動物って凄い。

感動して、僕はトリーを抱き上げた。

ついこの間まで吹けば転がるぐらいに軽かったのに、いまはずっしり重くなった。

太い足には鋭く尖った黒い爪。顔立ちも細長くなってきた、少し大人びてきたように見える。身体はまだふわふわ水色の産毛に覆われているけれど、じきにこれも生え変わるだろう。

「ほんと、トリーは凄い。でもって可愛い」

腕の中で居心地のいい場所に落ち着くと、トリーは頬をすり寄せ甘えてくる。その身体を抱きしめて、僕は黒い瞳に視線を合わせて約束した。

「飛べるようになったら、二人で一緒に狩りをしような」

小さな翼を軽く握って握手すると、トリーはぴゅーと返事をした。

ふわふわ、ふわふわ

水色羽毛が宙を舞う。

換羽だ。

産毛が抜けて大人の羽に生え変わる、鳥にとって大事な時期。

「こういうときは病気になるやすいから気をつける」

アキも言っていたように、トリーもどこか落ち着かなかった。

しょっちゅう身震いするし、痒いのか、あちこちの毛をクチバシでつまんで引っ張っている。産毛が抜けて地肌が見えても爪やクチバシでがりがり引っ掻くので皮膚が赤くなってしまっていた。これ以上は傷がつく。掻かないようにと手を出すと、トリーはがぶりと噛みついた。

「いつつ……！」

とつさに手を引つ込めると、トリーはきゅーと哀しそうに一声鳴いた。

ごめんね、ごめんね。

そう言うように、きゅんきゅん鼻を鳴らして頂垂れる。

「いいよ、トリー。急に手を出したから、びつくりしたんだよな」

クチバシの尖りが当たった部分が赤くなっている。けれど血は出ていない。噛みついたといっても、じゅうぶん手加減してくれたのだ。まだ小さいのにこんな僕を気遣って、トリーはなんて親思いなんだろう。

そんなトリーが愛しくて愛しくて、羽が抜けてまだらになってしまった身体をそつと抱き上げ頬を寄せる。するとトリーは首を伸ばして僕の髪にクチバシを入れ、ちゆくちゆく毛繕いを始めた。お礼に僕もトリーの身体を優しく掻く。これで二人は仲直り。僕たちは家族なんだから、遠慮しなくてもいいんだよ。

ひゃー、ひゃー、ぴゃーああ

切ない声が部屋に響く。換羽が始まってから、トリーは夜になるとよくこうして鳴いていた。

「トリー。大丈夫だよ、トリー」

名前を呼ぶとそのときだけはトリーは落ち着き大人しくなる。そ

ここでランプの光を落としてうとうとするまで背中を撫でて、それから僕も寝ることになっていた。なのに今日はいつもと違う。僕が離れると、すぐに眼を覚まして鳴き出すのだ。

いつもならすぐに眠ってくれるのに、どうして。

寝台わきの小さな台。その上に置かれた籠の中からトリーはじつと僕を見つめている。そして少しでも離れると、「行かないで」と翼をばたつかせて悲痛な声をあげるのだ。

困った。

いい加減僕も眠くなってきた。離れるといつても手が届く距離だ。なにかあってもすぐに駆けつけられるのに、どうして大人しく寝てくれないんだ。

トリーは鳴き止まない。仕方なく、僕は枕元に籠を移動させることにした。

ここなら本当に眼と鼻の先だ。これで落ち着いてくれるといいのだけれど。

布団に入って寝ようとする僕を、トリーが籠からじつと見ている。

「おやすみ、トリー」

頭をそつと撫でて寝ようすると、トリーはよろよろと立ち上がった。眼を丸くする僕の前で籠を乗り越えようと身を乗り出して、そして頭から転がり落ちる。

「！ 危ないっ……」

籠に戻そうとする手を押しつけて、トリーは必死になって這ってきた。ばたばた毛の抜けた翼を動かして、布団の中へと頭を入れる。そして振り返ってぴゃーと鳴いた。ここで寝たいと、まるでそう言っているようだ。

つぶらな黒い瞳と眼が合って、僕ははっと気がついた。

そうだ。親鳥は雛をお腹の下に入れて寝る。雛は全身を柔らかな羽毛に包まれて、親に守られながら安心して眠るんだ。

僕はなんて馬鹿なんだろう。

小さい頃は、僕だって母さんと一緒に寝ていたのに。

なのに僕はトリリーの親だと言いながら、一度だって一緒に眠ったことがなかったんだ。

トリリーはまだ雛なのに。心細くて必死になって鳴いているのにひとりで寝るだなんて、どうしてそんなことが言えるだろう。

「トリリー、ごめんな。一緒に寝よう?」

トリリーを引き寄せ背中を撫でると、すぐに寝息が聞こえてきた。

すー、すー、ぴすー、すー

ああ、やはり。やっぱりずっと寂しかったんだ。

囁くような寝息を聞きながら、僕もすぐに深い眠りに落ちていった。

一緒に眠るようになってから、トリリーの夜鳴きはぴたりと止んだ。僕はといえば、寝ている間にこの可愛い雛を潰してしまわないかと心配だったが、それはまったくの杞憂だった。

そもそも寝相は悪くないというのもあるが、トリリーは僕の顔のそばで寝るのが好きなんだ。だから目が覚めるとトリリーは布団の中に入っていたり、いなくなったり。いまは暑いから、布団の外で寝ていることも多かった。

もっと早くこうしていれば良かった。

一緒に眠るなんてことができるのも、本当にいまだけなのに、僕はなにを怖がっていたのだろう。

3 しやべる鳥

翼でバランスをとりながら、おっかなびつくり歩いたトリーが振り返ってきゃーと鳴く。

まるで「すごいでしょ」と言っているようだ。

けれど偉いぞ、と褒める前にすんと尻餅をついてしまい、小さな尻尾を左右に振って、トリーは低くきゃると鳴いた。

落ち込んだ様子もまた可愛くて、僕は笑いながらトリーを籠に戻してやる。

ふわふわだった水色羽毛はほとんどが抜け落ちてしまっていた。

耳の近くと胸の前、そして両の翼の付け根に少し残っているだけで、ほかは地肌が露出してしまっている。あのふわふわがなくなったせいでトリーの面差しもすっかり変わってしまい、身体は2周りほど小さくなったような気さえする。それに柔らかかった肌がだんだんと固くなり、淡い桃色だった肌の色もどこかくすんだ色になってきた。

産毛の後には大人の羽の芽、「軸」が生えてくるとアキは言っていたのに、そんな気配はぜんぜんない。

なにか悪い病気なのかと心配したが、トリーは上機嫌で食欲も旺盛だ。

るるるー、きゃるー、きゃるー、きゃるー、ぴーるるる

僕が畑仕事をしている間、畑のそばの、涼しい木陰でトリーはひとりで遊んでいる。

風にそよぐ柔らかそうな草の新芽、可愛らしい小さな花。飛んで

くる羽虫や地面を歩く丸い虫。とにかく動くものをじっと見つめてトリーはぱくりと口に入れる。そして食べられるものはそのまま食べられているようだ。

すこしだけでも歩けるようになって嬉しいのか、トリーは籠に入れてもいつのまにか外に出ていることがよくあった。僕は最初、鳶や森の動物に襲われないかと心配で、とてもじゃないけど目が離せないと思っていた。けれど畑の周りは柵で囲われているし、トリーは籠から出るといってもその周りからほとんど離れない。数日様子をみたが大丈夫そうなので、なにかあってもすぐに駆けつけられる場所に留めて僕はトリーを自由にさせることにした。

横目で見るとトリーはとても楽しそうだ。

近くの草を引っ張ったりクチバシで地面を掘ってみたり、そして自分で地虫を獲ったりもする。

それでも僕の与える地虫の方がやはり美味しいようで、トリーはお腹がすくと餌をねだる。満腹すると籠で寝て、目が覚めると小鳥を真似してさえずるような歌を歌う。

るるるるぴー、ぴーるるる、つーぴーつーぴー、きゃーるるる

畑仕事が終わったあと、膝の上にトリーを乗せて僕はつぶらな黒い瞳をのぞき込んだ。

「トリー、辛いところはない？ なにかあったら、すぐに僕に言うんだよ？」

両手で耳の後ろを搔いてやれば、トリーはうつとり目を閉じる。羽が抜けてしまっているけれど、それでもトリーはやっぱり可愛い。ふわふわの毛玉でなくなってしまうても、トリーはトリーだ。

もしこのまま新しい羽が生えなくても、僕とトリーはずっと一緒だって僕は家族だから。

ちや、……ちや、……ちやか、……ちや、きやるー……

おっかなびつくり歩く爪音に振り返ってみてみれば、トリーがぶるぶる震えながら立っていた。

「トリー！　ひとりで寝台から降りられたの？」

きやるー

「そうだよ」と翼をばたつかせ、そしてトリーはぼてんと尻餅をついた。

寝室から台所まで歩くななんて大冒険だったろうに。本当に、雖はあつというまに大きくなる。

その成長が嬉しかった。そして僕を追いかけて冒険までしたトリーが愛しかった。頬が緩むそのままに、僕はトリーを抱き上げ両手でそっと抱きしめた。

膝の上に乗せてやると、トリーはくたりと力を抜いて僕に身を預けてくる。

お湯に濡らして絞った布で、身体を綺麗に拭いてやるのだが、トリーはこうされるのがとても好きなんだ。全身からすっかり力を抜いて、すべてが僕のなすがまま。るるるるーと喉を鳴らす姿はとても鷹とは思えない。

声を出さずに笑いながら、僕は蜜蝋油を手を取った。ほんの少しだけ手に取って、地肌の部分に塗り込める。むき出しになった肌が

乾いて荒れるから痒くなるんだ。ならば、と行ってこの方法を試してみた。それからトリーは掻かなくなった。以来僕は毎日トリーの身体を綺麗に拭いて、蜜蝋油を塗ることにした。

目に入らないよう気をつけて、口の端と顎の下は丁寧に。ちよっぴり残った産毛には触れないように注意しながら蜜蝋油を薄く伸ばす。頭から順番にすり込んで、毛のない翼にとりかかり、そこで僕は気がついた。

翼がざらざらしている。

折り畳まれたそれを伸ばしてよくよく見れば、皮膚の下からぽつぽつ何か芽吹こうとしているようだ。

「これ……これが『軸』？」

きつとそうだ。

これでやっと、トリーの翼に羽が生える。

「やったな、トリー！」

喜びのまま抱きしめると小さな尻尾をびこびこ振って、トリーも嬉しそうにきゃーと鳴いた。

「ばあちゃん！ アキは、アキはどこ!？」

村長宅の庭先で薬草を干していたばあちゃんに、息せき切って声をかける。

ばあちゃんはアキのばあちゃんだ。小さくてシワシワだけれど村

一番の長老で、薬草の知識は誰にも負けないすごい人だ。僕たちは皆、親しみを込めて「ばあちゃん」と呼んでいる。

「あれあれ、ミカ。どうしたね」

「ばあちゃん！ アキはどこにいるの？」

「アキ？ ああ、ああ……街に行つとるが」

「街？ つてことは村長さんも一緒か……ばあちゃん、アキはいつ帰ってくるの！？」

「あれあれ、一度に言わんでも。そうさね。確か明後日戻るはずだがね」

「明後日！」

アキの馬鹿。なんでこんな時に街になんて行つてるんだ。

それまで僕は、どうすればいいだろう。

考え込んだ僕になにか感じるものがあつたのか、ばあちゃんは腰を叩きながら何度も大きくうなずいた。

「今年は春告鳥があちこちで鳴いたから、山には動物がたんとおる。雉でも狩つて食べたらええ」

そうか、雉だ！

はつとして顔をあげると皺だらけの顔をもつとしわしわにして、ばあちゃんは優しく微笑んでいた。

大丈夫、大丈夫。

力づけるようにぼんと背中を叩かれて、急に元気がわいてきた。

そうだ。僕が不安になつてどうする。トリーの方がよっぽど心細いに違いないのに。

ばあちゃんに礼を言つて、僕は家に向かって駆け出した。

「トリー、ただいまっ！」

寝台に置いてあった籠の中から立ち上がり、ぼやぼやの翼をばたつかせ、トリーはきゅんきゅん鳴いて僕を出迎えた。

トリーをひとりにするときは、僕は必ずここに置く。机の上だと落ちたときに危ないし、床に置くと今度はなを口にするかわからないからだ。檻に入れたり繋いだりすればもつと簡単だし安全なのだろうけど、僕は家族を繋ぐような真似はしたくなかった。それに寝台はトリーにとって特別な場所のようで、籠から出て僕がいなければ枕の近くから離れない。

トリーが孵ってからというもの僕らはずっと一緒だった。だからトリーはひとりになると寂しがる。滅多にあることではないけれど、それでも留守番させるときにはトリーに良く言い聞かせ、帰ってからはべたべたに甘やかすことにしていた。

お留守番がんばったね、と抱き上げて、うんと撫でてあげようと手を伸ばしたそのときトリーが再びきゅーと鳴いた。

きゅーきゅー、ちよりー！ きゅー

「……え？」

いま、トリーはなにか喋らなかつただろうか。

ぴたりと動きを止めた僕に「なにをしているの？」と言うように、首を上下に振りながら、トリーはだっこをねだって声をあげる。

ちよりー！ ちよりー！ とりー！ きゃーう

言った。

確かにいま、トリーは「トリー」って喋った。

こんなことって。

トリーが……じゃあ、トリーは。

胸の中でなにかが膨らみ、大きくなって溢れ出す。

それは鼻の奥をつんとさせ、目の前を水の膜で滲ませた。

「トリー……」

「はやく」と急かすトリーを抱き上げて、胸の中に閉じ込める。

言葉をなくした僕を慰めようと、トリーが頬を寄せてきた。「どうしたの?」と鼻を鳴らして小首を傾げ、そして僕の頬を優しく舐める。

ちゅくちゅくと音を立て、ざらついた小さな舌で零れた涙を拭いてくれる。

その気遣いが嬉しかった。

もうトリーが何者でもかまわない。

たとえ鳥でなくなっても、僕はトリーを手放せない。

4 小さな手

じゅわじゅわじゅわじゅわじゅわじゅわ

きゅるきゅるきゅるきゅるきゅるきゅる

「トリー、蝉の鳴きまねはしなくていいよ」

きゅるきゅるきゅるきゅるきゅるきゅる

「はははっ、名前はもう完璧だな」

背負い籠にトリーを入れて、僕は山を下っていた。

ばあちゃんと言った通り、たった一晩で獲物を獲ることができたのだ。

僕が獲るのはもっぱら雉。罾を仕掛けておいて、日を置いてから回収する。大物が獲れない代わりに畑仕事をしながらでもできるの
で、一人暮らしの僕にはじゅうぶんだった。

今日の獲物は雉が2羽。

あのときと同じだ。

トリーの卵を拾ったとき。

違うのは肌寒かった空気が熱を持ち、すっかり暑くなったこと。

トリーが孵って元気に大きくなったこと。そして見上げても見下ろしても、草木の葉が茂って見通しが悪くなったこと。

あのときはもっと空が広がった。葉の落ちた枝の間からトリーの産まれた巣を必死に捜して、それで見つからなかったのだ。加えて

いまのこの様子では、トリーの仲間を捜そうにもどうやって捜しているのかわからない。

トリーの親が見たかった。もし兄弟がいるなら会いたかった。大人になったトリーがいたいどんな姿になってしまうのか、僕は不安でしかたがなかった。

「おーい、ミカ！」

家の近くの木の下で、アキが手を振っていた。帰ってきたんだ。

僕は急いで　でもトリーの入った背負い籠を揺らさないよう気をつけて、アキの元に駆けつけた。

「留守にしてて悪かったな。これ、土産」

「ありがと。でもそんなことしなくてもいいのに。……ってこれ」「愛しのトリーちゃんに」

決まってるだろ、と差し出された箱の中には蝉の幼虫が詰まっていた。よくこれだけ集めたものだと感じしてしまう量だ。

確かにトリーは蝉が好きだ。地虫よりも美味しいらしく、差し出せば喜んで食いついてくる。

でもそろそろ虫は卒業しようと思っていたのに。ひっそりと溜息をついて、僕はアキを家の中に招き入れた。

勝手知ったる家の中、淹れておいた茶を湯飲みにとりわけるとテーブルの上に置き、アキはどっかと椅子に腰を下ろした。

「……で？　どーしたよ」

「うん……」

雉を置いて荷物を片付け、籠の中からトリーを抱き上げアキの膝の上に乗せてやる。

アキとは何度も顔を合わせているからトリーは怖がることもない。きやあきやあ歓声をあげて翼を動かし、尾も上下に振って上機嫌だ。

「あらら。ずいぶんハゲちゃったなあ。でも翼には羽も出てきたから……いてっ」

興奮したトリーが嬉しさのあまり、アキの腹を蹴ったのだ。トリーの足はすっかり太くなり、爪も鋭いから蹴られると結構痛い。

「こーら。痛いだろ」

めっ、と翼の下に手を入れて、アキはトリーを持ち上げた。

翼と足を交互にばたつかせ、きやるくーきやるくーとトリーは楽しそうに声をあげる。その様子を目を細めて見ていたアキが、なにかに気づいて眉を寄せた。

「なんだ、こりゃ」

膝を揃え、アキはトリーの腹を上にして寝かせると、胸の辺りでふさふさしている二つの水色毛玉を手を取った。最後まで残っているトリーの産毛。風もないのに翼と一緒に左右に振れて、まるでそこにも翼があるようだ。

「……これ」

指先で毛玉を握ったアキの表情が険しくなった。

真剣な目つきでトリートの毛玉に指を這わせ、「身」の部分の形状を確かめている。やがて指を離すが人差し指は水色毛玉にふれたまま。そのまま指を動かすと、つられてトリートの毛玉も左右に揺れる。羽毛に埋もれたアキの指は、トリートによってしっかりと握りしめられていた。

「うちに来たのって……これが理由か？」

「うん……」

翼のほかに、5本の指のある小さな手。産毛が抜けて、顔立ちも体つきも鳥とはどこか違ってきた。尻尾だって少しずつつ伸びてきて、トリートは徐々に「鳥」ではなくなってきたようだ。

「ずっと鷹か鷲だと思ってたんだ。……違っつていわれても、いまさら名前は変えられないし」

「はあ？ ……名前？」

アキは目を丸くした。

こんなときになにを言っているんだ。

そんなふうに見まれたけど、これだって重要なことなんだ。

「鳥だから、トリート。もうトリートだって自分の名前、覚えてるからな」

きゅるくーきゅるくー、トリート！

「よーしよし、よく言えたな、トリート」

顎の下をくすぐると、トリートはくるくるくーと喉を鳴らして喜んだ。

「喋るのか……」

「最近覚えたんだ。なー、トリー」

きゅるきゅーくーくー、トリー、トリー、トリー！ きゅるきゅるきゅー

「ほら、アキおじちゃんから蝉を買ったんだ。美味しいうちに食べような？」

きゅるきゅる、きゅるるっ、きゅー

食べる食べる、はやくちょうだい。

首を伸ばして口を開け、翼をばたつかせて餌をねだるトリーはまだまだ難だ。

腹一杯になるまで食べさせてから耳の後ろをくすぐってやり、とうととしたところを見計らって僕は静かに部屋を出る。

声を潜めて僕はそっと囁いた。

「なあ、アキ。トリーは……なに？」

「……俺も見るのは初めてで、はつきりしたことはわからない。でも」

「でも？」

「恐らく……ドラゴンじゃないかと思う」

「ドラゴン……？」

頷くアキに、僕はほっと胸を撫で下ろした。

「そっか……ドラゴンか」

「おい、なに安心してんだよ」

これは大変なことなんだぞと小突くアキに、僕は口をとがらせる。

「だってトリーは虫じゃないんだろ？ いいことじゃないか」

「虫い？」

「そうだよ。いままでずっと、トリーは虫ばかり食べてきたんだよ？ 大きくなって虫になったらどうしようって、ずっと心配してたんだ」

そう、それだけが気がかりで、僕はこのところ夜もまともに眠れなかった。

トリーがドラゴンで良かった。

もし虫だったりしたら、食事のたびに共食いさせることになっていたから。僕はそれがどうしても嫌だった。

とりあえず一安心だけれど、どうやらアキは違ったようだ。ものすごく疲れた顔をして、背中を壁に預けるとずると座りこんだ。

「……なんで……虫なんだよ……」

「足が6本あるから」

「ばっかやろっ！ 虫は足の他にも羽があるだろ？ だったらトリ

ーはそれだけでも虫とは違うー！」

「あ……」

そうか。トリーの翼が虫の羽だと考えれば、トリーの足は4本だ。それなら虫の仲間には入らない。やっぱりアキは物知りだ。

でも、もうひとつ心配なことがある。

アキの瞳をじっと見つめ、僕はその疑問を尋ねてみることにした。

「ならば。トリーはカエルでもないよね？」

「あっ……たりまえだろ？ なんでカエルなんだよ」

一瞬言葉を失ったが、アキはちゃんと答えてくれた。

なんだか怒っているのが気になるけれど、街から帰ったばかりできつと疲れているんだ。アキは、本当は信頼のおけるいい奴なんだから。

「だってさ、オタマジヤクシやアマガエルを餌にしたことがあったから」

大きくなって手が生えるだなんて、まるでカエルそのものだ。

トリーは鳥の雛とはどこが違う。

もうだいたい前からそんな気がしてならなかった。だからちよつとしたことでも不安にかられ、少し神経質になっていたのかもしれない。

でもトリーがドラゴンだと知って、僕はとても安心した。

トリーがたったひとりだけの生き物だったらどうしようって、それだけが怖かった。

それでもドラゴンなら。

少なくとも仲間がいるってことだ。

本物を見たことはないけれど、名前だけは知っている。全身ウロコに覆われた、トカゲに似た大きな生き物。鋭い牙と爪を持ち、背中には羽まで生えている。

子供心に格好良いと思っていた。トリーがまさかそのドラゴンだなんて、なんだかわくわくするじゃないか。

「トリーがドラゴンか……」

「ミカ、落ち着け。そしてよく考えろ」

このとき僕は、確かに浮かれていたのだろう。だから、アキがなにを心配しているのかよく理解していなかった。

ドラゴンだと言われるても実感がわかなかつたし、怖い生き物だと

いう話を聞いてもオオカミみたいなものだ、そう思っていた。オオカミは犬の仲間の人に懐いたりもする。トリーはあんなに懐いているから、きっと僕のいうことも聞いてくれる。

僕は勝手に、そんなふうに考えていた。

5 黄色いクチバシ

手が生えて動かせるようになってくると、トリーは急激に変化した。

まず食べ物。

虫だけではなく、肉も食べられるようになったのだ。

ここのところトリーの食欲が増してきて、地虫が不足気味だったのだ。だからこれは助かった。雉を捕って二人で分ける。これが最近の習慣になっていた。

そしてトリーの容姿。

産毛はすべてさっぱりと抜け落ちて、むき出しの皮膚は硬くなり、やがて全身が美しいウロコで覆われた。

身体の側面に1本黒い筋のある、艶やかな深い青。光の加減で青から緑に色が変わり、光を弾いて煌めくさまはとても綺麗でいつまで見ても飽きないほどだ。ウロコを触ればすこしひんやりして、そしてとても滑らかだった。

僕の爪など歯が立たない、固くて丈夫なトリーのウロコ。もう痒くはないようで、噛みついたりひっつかいたりはしなくなった。

それでも僕は、毎晩トリーの身体を拭いている。

だってトリーときたらまるでおねだりするように、布をくわえて行儀よく僕の前に座るのだ。歩けるようになったいま、トリーを妨げるものはなにもなかった。両手両足を使って机に登り、布をくわえて僕の前に持ってくる。

期待に満ちてきらきら輝く黒い瞳。そのうえごろんと横になって腹をみせられてしまったら、僕はとても断れなかった。

ウロコの部分を丁寧に拭いてやるとトリーはさらに艶をまして輝きだす。終わった後は僕の肩まで登ってきて、お返しにと毛繕いをしてくれる。小さな手が頭をまさぐり、それが少しこそばゆい。トリーは鷹ではなかったけれど、僕はじゅうぶん幸せだった。

それにぼやぼやの羽が生えたトリーの翼。こちらは抜け落ちることとはなく、そのまま大人の羽になった。美しく、やはり輝くばかりの深い蒼。肩から尾の付け根までは風切り羽がすつと伸びて、ここだけみれば本当の鷹に見える。

同じような羽は耳の後ろにも生えてきた。長く伸びた耳殻の後ろで伸びた羽。豪華な冠を冠っているようで、トリーはまるで王様だ。そして尾も徐々に伸びてきて、トリーは立派なドラゴンになりつつあった。

「ドラゴンってのは、恐ろしい生き物なんだ」

そう言うアキは、困ったような、そしてとても難しい顔をした。

「この辺りにいるって話は聞いたことがない。ドラゴンて種はもつとずっと北の方の、竜骨山脈の奥地に住んでるって言われている」「じゃあなんで。トリーの卵は裏山で拾ったんだよ？」

「だから不思議なんだよ。ドラゴンってのは小さいヤツでも牛ぐらいの大きさになるだろ？ 卵が裏山にあったなら、親が近くにいるはずだ。けどドラゴンなんてどこにもいない」

そう、ずっとそれが不思議だった。

トリーの卵を見つけたとき、近くにそれらしき巣はどこにもなかった。だいたいドラゴンなんてものが近くにいたら足跡だって残る

はずなのに、そんなものは今も昔もどこにもない。

「……飛んできた、とか」

「おまえな。空飛ぶドラゴンてのはでつかいんだぞ？ 家よりも大きいんだ。そんなのが飛んでみる。誰かしらに見つかるだろ」

「だよなー」

ドラゴンなんてのは絵で見たり、話で聞いたりするだけの生き物だ。

賢くて、けど凶暴で。ときには人を襲ったりもする。中には大人しい種類もいるらしい。けれど基本的に人には懐かない生き物だ。懐く奴は家よりでかい空飛ぶドラゴンだけ。そいつはドラゴンの王様で、僕たちよりもよっぽど頭が良いらしい。

「じゃあ、トリーはドラゴンじゃないかもしれないよな」

「馬鹿いえ。足が4本あって翼まで持つてるのはドラゴンだけだ」

「……もし。もしトリーがドラゴンだったら、どうなる？」

「ドラゴンは人に懐かない。そして基本的に肉食だ」

「……………」

「わかるだろ？ もともと住む世界が違うんだ」

いずれ手に負えなくなる。だからあまり入れ込むな。アキはそう言っていた。

トリーがドラゴンだとすれば、確かにその通りなのかもしれない。けれど、やっぱり違うんじゃないだろうか。

「クチバシがなー、残ってるんだよなー」

くちやくちやく、あむあむ、くちやくちやく、きゆるぴー

両手でクヌギの枝を握り、顔を斜めにしながらトリーはそれを噛んでいる。口の中が痒いのだ。

確かに最近よく甘噛みすると思っていた。毛繕いの延長だろうと放っておいたら、タベ椅子の足をがりがり齧ってダメにした。びっくりしてトリーの口の中を見てみたら、クチバシの内側上下に2つずつ、ぽつぽつ白い歯が見えた。他にも小さな盛り上がり方が奥の方まで続いていて、どうやらこれが痒くて噛んだらしい。

クチバシがあって、歯も生えて。

そして鳥のようなトリーの翼。

子供のころアキの家で見たドラゴンは、ツノがあって牙も鋭く瞳ももつと怖かった。そしてなによりその翼。コウモリの羽のように膜が張って、トリーのような羽じゃない。

「トリーは鷹とドラゴンの子供かも」

そうだったら良いのに。

もしそうなら、トリーは純血のドラゴンじゃないってことだ。だったらずっと一緒にいられるじゃないか。

そんなことを考えながら布団に入るとトリーがそっと寄ってくる。もうずっと、僕らは一緒に眠っていた。

頬と頬とをくっつけて、二人でひとつの枕を使う。トリーは僕の顔の隣で身体を丸め、尻尾の先だけ布団に入れる。そこを軽く握ってやると、きゅるきゅる嬉しそうな声が響いてくる。

そしてすぐにトリーは眠り、深い寝息が聞こえてくるのだ。

すー、びすー、すー、びすー、すー

トリーの寝相は僕と同じで悪くない。

でも少し困った癖はあった。ひんぱんに寝言のように鳴いたりするのだ。

うにやうにや口の途中でしゃべるだけなら可愛いけれど、たまに「きやるっ！」と大きな声を出したりする。以前はそれで目が覚めてしまったけれど、僕も最近では慣れてきた。ああ、なにか夢を見ているんだな、とそう思いながら寝てしまう。

でも一度だけ我慢ならなかったことがあった。

トリーが寝ながらおならをしたのだ。

あまりの臭さに飛び起きて、思わず窓を開けてしまったほどだった。

あれだけは勘弁してくれ。次の日トリーにそう言ってみたが、きつとわかっていないだろう。だってトリーはあの臭いの中で、ぴくりとも動かずやすやすや眠っていたのだから。

それでも僕はトリーを嫌いになんてなれなかった。

ふわふわの水色毛玉じゃなくなって、姿形が変わっていてもトリーはトリーだ。

可愛くてたまらない、僕のトリー。

たったひとりの僕の家族。

父さんと母さんが死んでから、初めてできた家族なんだ。

くしゅっ、くしゅっ、へくちっ

「トリー？ どうしたの？」

両前足を顔の前ですり合わせ、トリーが顔を掻いていた。

顔、というより鼻先だ。くるくると猫が顔を洗うように手を曲げて、しきりに鼻をかむような仕草をする。そして気になるこのくしやみ。

夏が終わり、短い秋がやってきた。急に涼しくなってきた、トリーは風邪をひいたのだろうか。

今まで病気らしい病気などしたこともなかったのに、どうしようくしやみの治まらないトリーを抱き上げ僕は家に向かって走り出す。

とりあえず寝かせなきゃ。

慌てて寝台にトリーを降ろし、鼻の様子を見ようと小さな両手をそつと外す。

すると、なにかが僕の手に落ちてきた。

え？ と見れば、それはくの字に曲がった黄色く固い

「うっ……うわああっ！」

ぼろりと、本当にぼろっとトリーのクチバシが剥がれ落ちた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4009ba/>

トリーの歌う、愛のうた

2012年1月14日07時46分発行